

五里の書庫

経済学科2年 加藤 昌

一
ガタガタと車の後ろにつまれた本たちが音を立てているのを聞きながら、青年は母の運転する車の中で、こう考えていた。

『亡くなった祖父の古書を無理して積み込んで僕は本当にこれを読む気なんだろうか。本を読まない僕だが、少なくとも売ろうというんじゃないはずなんだ。』

実際に彼ほど、これまでの生涯において本を読むことを疎んじてきた人間もいなかった。とは言っても、彼は活字嫌いなわけでは無かった。新聞は毎日の様に目を通していたし、教科書やらもしっかりと読む方だった。

ただ彼がいつも本、特に小説を読んで思うのは『結局、他人の人生じゃないか』という気持ちに支配されるからだだった。どうも活字から浮

かびあがる世界は彼に何かしらのぼんやりとした印象は与えても、それが彼の心の中でうまく像を結ぶ事はなかった。彼はいつもピントの外れたものを見ている様な気がしたが、それを今日まで治そうという気にはなれなかった。彼は真面目な学友たちが貴重な時間を割いてまで小説を読む姿にどこか違和感を感じていた。それほどまでに彼は読書というものを疎んじてきた。しかし、今日になって母と共に亡くなった祖父の財産を整理する段になって、祖父の家に残されていたものが最低限の家財と山のような本だけだった時には、どこか心を打たれた。テレビはもちろんラジオもない生活は彼にとって間違いなく違和感を感じさせるはずのものだったが、この時ばかりは心の中に眠るものを呼び覚まされるような気がしたのだ。

祖父の生活は質素でありながら、容易には手の届かぬ奥ゆきをもっている様に感じられた。そしてその奥にあるものは、きつと自分が見たことのないものだろうと彼には思えた。彼は思わぬ所から新しい地平が開けたのを喜び、その奥に足を踏み入れてみたいという気がした。『この本の中に祖父が見たものが詰まっているんだ。』

こう思ったのが、車に本を積んだ理由だった。だが車に本を積んだものの、家に着いたらすぐに読もうという気にはなれなかったのは、やはりまだ依然として読書に対する違和感が無くなったわけではなかったからだだった。

『所詮他人の人生じゃないか、祖父は何故家に本だけしか置かなかったのだろう。人の書いたもので、この何処までも続く自身を打ち破れるとでもいうのか。』

彼は祖父の深みに足を踏み入れたと思ったものの、何処か祖父のようになるのを怖れた。そのとき彼は今まで感じていた違和感の先に深みがあるのだと気が付いた。だがそれでも違和感を感じる自分自身を変えていこうという気にはなれなかった。彼は違和感の肯定と深みの魅力との間で板挟みになった。

彼は母に祖父の事を尋ねることにした。思え

ば祖父の事は何も知らなかった。以前に家を訪れたのも十年以上前のことだった。

「お祖父さんはどんな人だったの。」

これに対する母の反応は素気ないものだった。

「ただ静かな人だったわよ。」

「ずっと。」

彼は母に聞き返した。母はチラリと彼を見ると、何か少し顔を曇らせて話し始めた。

「いや、戦争の前までは文学の話をよくお婆ちゃんにしたそうよ。でも中国から帰ってきた時には少し人が変わったみたいだね。私もお婆ちゃんに聞いた話なんだけどさ。」

そういうと母は祖母から聞いたという祖父の話を話し始めた。

二

祖父が戦地から帰ってきた事は、祖父が村の入り口に姿を現した時にすぐ村人の間に広まった。まだ若かった祖母の耳にもこの情報は伝わり祖母は伝えに来た村の男にこう聞いたのだという。

「怪我はありませんか、気は沈んでいませんか。」

村人は祖母に「安心なさい心身とも大丈夫」と言っ

て夫の事を家で待つことにした。お腹をすかせ

ているはずだと思つたから、村に探しに行かない方が良くと思つたのだ。

祖父はやがて重い足取りで門をくぐり、玄関

口の前でたたずみ、しばらくしてから中に入っていた。無言のまま父のいる書齋を過ぎ、仏壇に線香も立てず、ただ縁側に座って畑の広がる方を見ていた。彼が帰ってきたのを知ると、

彼女は「ご無事ですか」とだけ聞いた。彼はそこでやっと重い口を開いた。

「戦争では何もありませんでした。まあ、仲間の中には爆音やら度重なる戦闘で気がふれた奴もいましたが私自身はそんなことはありませんでした。それに見てのとおり五体満足です。」

彼女はその言葉には満足できなかったらしい。こう聞き返した。

「じゃあ何故そんなに暗そうにしていられるのです。」

「火薬や銃弾、蔓延する犯罪行為は対して私の心に何も跡をのこさなかった。でも気付いてしまったのです。引き揚げる途中、自分が育んだものが馬鹿らしいものだったことに。」

「何を途中で見たのです。」

彼女はせきを切ったように彼の腕をつかみた。ねた。彼はそれを一瞥すると、故郷の青空を眺めながら、タメ息をつき話し始めた。

「話せば長くなります。人は時に心の頼りをつくるものです。戦争のさなか戦友達は色々な頼りを失っていききました。けれども私は故郷が無事だったことを聞かされており大して不安な気持ちには陥らずにすんでいたので。しかし審判の日とはいずれ来るものです。」

志賀直哉の『正義派』という小説を読んだことはありますか。話は事故を目撃した工夫が正義の為に証言をしますが、一時満足してもすぐに報われない感覚に襲われるという話です。私はこの話を引き上げる途中で思い出しました。

私は戦争の間、国の為に戦う以上に自分の信じるための為に戦っているのだと一種の自負がありました。中国を共産主義から守るため、欧米の植民地がこれ以上広がらないために戦っていたのです。もちろん日本の偽善的な主張にも薄々気付いていたのですが、それでも自分の信ずる所は間違っていないと思いました。

とにかく私は戦地から引き上げる時まで正義を行っているつもりでいたのです。戦争に負けた、日本は義ある国でもましてや神国ではない、その事は別にいいのです。ですが私の正義は一体どうなるのか。戦争が終わってからあの日まで私はその事を考えていました。

その日はちょうど八月中旬でやっとな国民党軍

が武装解除をするように言ってきた日です。

私はついつい中国の農村の人達も戦争が終った事を知っているのだと思っていたのですが、私の属する部隊の占領地の農村ではまだ日本が負けた事が伝わっていなかったようでした。私はこれから何処に連れていかれるのかもわからない、という旨を伝えに農村に行きました。

日本が負けた事を聞いた時の中国人の顔は忘れられません。喜びに満ちたようでしたが、その地域は日本が来るまで国民党と共産党が争っていたものだから、何処か顔を曇らせていました。ですが、やはり今までの笑顔は作り笑顔だったのです。

私はその時、報われないという気持ちに支配されました。何も日本が農民があるいは自分が、というのではありません。というのも私は共産主義から中国を守ったという自負はありません。それはたぶん生涯変わる事はないでしょう。例えば日本が神国でなかったとしてもです。

では何が報われないのか、それは行為に対してだけではありません、ただ漠然とどう行動しても良い結果待ちはしないということに報われないとおもったのです。その時、私はよく友人達とした文学談義を思い出しました。『正義派』を思い出したのはその時です。正義とは何

かについてはいくつも取りようがあります。ですがこの時の自分が少しは正義に思っていたのに、報われないと思つたのは事実なのです。それにどちらにしたって正義がないならば、仲間は無駄死にだったではないかとも思いました。

でもまだ自分の精神というのが文学に依拠している間は良かったのかもしれませんが、私も悪くもまだ工夫の仲間なのです。だから自分の人間性を信じる事もできました。いやむしろこの時の自分ほど人間らしい人間はないと思つたほどです。

ですがそんな人間性という言葉に酔つた自分もいつかは終わるものです。私が村を去る時に浮かび上がってきた言葉はこうです。

『お前は確かな人間性を持つことに自信を持つようだが、農民達の作り笑顔には気付く事ができなかつたじゃないか。』

その時私の中で、人間であることへの自信が死にました。はっきりと言いましょ。私はたくさんの本を読んできた。そして登場人物を相手に理解をしてきたと思つていました。けれどもそこから汲み取れてきたモノは自分から見た相手であつて、本当の相手そのものではなかつたのです。そういう意味で読書は死んだものと

なりました。限りなく相手の立場にたつて見たからと言つて、相手の立場まさにその場所から見なければ一体なんの意味があるのでしょうか。作り笑顔に気付いてもせずに。そういう事に気付いたとき、自分も含めおよそ知識人と言われる人の態度、あたかも他人の立場を理解しているかのような振る舞いは欺瞞だと思つたのです。

それにとえ相手の立場に沿う事をやめてメッセージを重視しても何になりましょう。何故ならより自分を人らしくさせるものが、今では自己に酔いしれた人間だけを作り出すことは、あの農民たちの作り笑顔で明らかではありませんか。そういう意味でメッセージは私達にしか届かないのです。彼我をこえた 他者そのものへの理解には至らない、そう結論付けました。

私は自分が今まで読んできたものがわからなくなりました。そういう意味で私は言わば五里も続く霧のような本とともに、いや五里ほどの本の中にいるのです。いくら読んでも本は私を悩ませるだけのものになりました。結局は堂々巡りなのですから。

とにかく私はもう人間性やメッセージといったものを追うのはやめにします。良いにしろ悪いにしろ私は私以上のものではないのですから。』

三

母が祖父の事を話し終えると彼は母にこう切り出した。

「つまり、本を読んで得た頼りの文学も当てにはならないと気付いてしまったんだね。」

「私は断言できるほどお婆ちゃんからお祖父さんの事を聞いたわけではないんだけど、たぶんそういう事なんでしょう。でもね一応この話には続きがあるのよ。家に本しかなかった所を見てね。」

彼は母の言葉に安堵すると共に不安定な物の上に立たされるような気がした。後ろでガタガタと音を立てる本の中にまだ答えの出されていないものが混じっていると思うとどこか恐ろしい気持ちになった。彼としては祖父の遺産である本を読む上において自分も祖父と同じ道を通り、いつかは自分の道に入っていくのだという心持をしていたのだが、いずれ自分も堂々巡りをやるはめになるのではないかという考えに至り、それを怖れた。

車はしばらく走り続け、そのうちに不思議と本の立てる音だけが彼の耳に残った。彼は過ぎ去る風景を見ながら、日本に帰る時の祖父もきっとこんな思いで中国をあとにしたのだろうと思うと、再び祖父の家に足を踏み入れ、山ほど

の本を目の前にした時のような心境に浸った。「確かに僕は祖父をおいていく事はできないんだな。」

彼はそう思って、母に続きを話してもらおうことにした。

四

祖母は祖父が文学をやめる時にこう言ったのだという。

「私には難しい事はわかりません。けれど昔、論語には『詩経には詩が三百もあるのに邪念は一つもない』と書いてある、と言って聞かせてくれたではありませんか。たとえ自分の心が相手と通じていなくとも邪念がなければ、それで良いじゃありませんか。どうして悩む必要がありませんよう。」

彼女は彼にそう言った。すると彼は笑って「そうかもね。」と言ってしばらく黙った。

その時の彼はただ空を見上げてこれからの人生の事を思った。国もない、軍隊もない、工場もない、そして文学もない。ただ畑だけが目の前に広がっていた。そしてこれからは戦争の傷跡をいやす為に畑を耕し、妻をやしないう子を育て、老いていくのだろうと思った。

彼は畑の中を歩きながら土の匂い、草の香り

に思いを凝らした。故郷に浸ると彼は、自分は昔からここにいたのだ、自分は文学に恋焦がれていただけで、やっとそこから目覚めたのだと思った。

『恋からさめて、あるのは畑。これじゃ、どこかのリョーヴィンさんじゃないか。』

そう彼の頭によぎった時、自分がトルストイも何も捨てられていない事に気が付いた。

『僕には僕の人生が待っている。ならたとえ向うの本心に気付けなくたって、それでもリョーヴィンとキティが結ばれた様に、僕だっついつか自分で裏切ってしまった文学との和解の為に生きていく事だっつてできるはずじゃないか。』釜戸に薪を入れている妻のもとにたたくみ彼はただこう告げた。

「いつか本当に本から答えを見つけたら、自分に向き合える様になったら、その時私は息子や孫たちにくつもの話を聞かせてみるよ。だからその日が来るまで、本を読んでみようと思う。」

それが今の私にとってのせめてもの答えだからさ。」

妻はただ笑顔で彼を祝した。

五

祖父の古家から出た車はとうとう自宅に近いリサイクルショップについた。母は祖父が使っていたいくつかの皿の入ったダンボールを持って入り口に向かった。そして息子に「本はどうするの。」と聞いた。

彼としては心の何処かに本を売る気が古家を出た時はあったものの、今ではその気もなくなってしまう。そして母にこう返した。

「お祖父さんの大切な本だからね、持ってこれたのも全てではないけれど、今ある分は大切にしよう。」

それにこう思うんだ。きっとお祖父さんは答えを見つけたらただだ。ただ話す機会を得られなかっただけなんだ。だから僕は本を読むことでそれに償おうと思うんだ。」

彼はそう言ったものの本当の所は自信は無かった。けれども本に違和感を覚えた自分と、本にあって答え探しに苦しんだ祖父とはどこか同じ存在に思えた。だから祖父が見つけたであろうページを自分も見つける事ができるはずだと思っただ。

『今の僕になくて、祖父の残したものの、それがきつと本の中に埋もれているはずなんだ。』

だからその所を僕はすぐにでも開いてみようと思う。』